

5月10日 エル・パソの金環日食

大越 治

金環日食は皆既ほどの魅力はないとはいえ、やはり独特の雰囲気があり、それなりの魅力がある。それ以上に、1987年以来皆勤を続けている私としては、この日食をはずすわけにはいかなかった。

観測地には、天候と交通の便の両方を満たす所としてテキサス州のエル・パソを考えた。1年ほど前から計画を立て始め、最初は単独行も考えたが、いつものメンバーに声をかけるとあっという間に小さなグループができあがった。以前から各地で出会うことが多かったイタリアのアスカリー氏からも連絡があり、それじゃあいっちょうエル・パソで会おうじゃないか、という約束もできた。

連休最後の5月7日(土)。勤務を終えて大急ぎで成田に向かう。すでに綿貫、吉村、木寺、辻村、有馬の各氏は到着しており、私が6名のメンバーの最後だった。空港では佐藤精一ご夫妻やスカイウォッチャーの川村氏などにもお目にかかり、いよいよ出発の気分になる。

ダラス経由でエル・パソに入ると、案に相違してベタ曇りだ。それでも予約を入れていたクオリティインに電話をかけて迎えを頼み、部屋に落ちつく。早速ウェザーチャンネルを見るが、あまりよい雰囲気ではない。

8日は観測地選定と観光の予定だ。朝からベタ曇り、遠くの雲からは雨が落ちてきている様子も見える。意欲をそぐ光景だ。クオリティインにはかなり広い芝生があり、見た目もなかなか良い。難点はスプリンクラーの散水である。観測中の水浸しはごめんだ。庭仕事のおじさんに、日食当日の散水を止めてくれるように頼むと、すんなりOKがでた。これで観測地は決まりだ。実に簡単である。

空港でレンタカーを借りて、ニューメキシコに入る。目的はサンズポットの国立太陽天文台だ。7人乗りのミニバンの運転は吉村氏、私がナビゲータを勤める。初めはとてこわい。4時間ほどで天文台に到着。雨が降り出す。日曜日にもかかわらず、コロナグラフも塔望遠鏡も、一般見学コースは開いている。塔望遠鏡などはすぐ足元まで自由に行けて、さすがにアメリカの天文台は開かれていると感じる。

山を降りてアラモゴールドまで戻り、スペースセンター博物館をめざす。近くのホワイトサンズには、スペースシャトルの着陸滑走路があるのだ。小高い丘の上にある博物館まで続く道は何と「2001号線」だ。太陽天文台までの道が「6563号線」だったし、アメリカのお役所はなかなかしゃれたことをする。と思って到着すると、なんと日曜休館だった。続いて向かったホワイトサンズ。せっこうの白い砂でおおわれ、まるで雪原のようだ。強い風の中で雲が切れ始め、アメリカ到着以来初めての太陽に出会った。少し希望がわく。

9日はリハーサル日。今までどうって変わって快晴だ。前日にあまり天気がよすぎると不

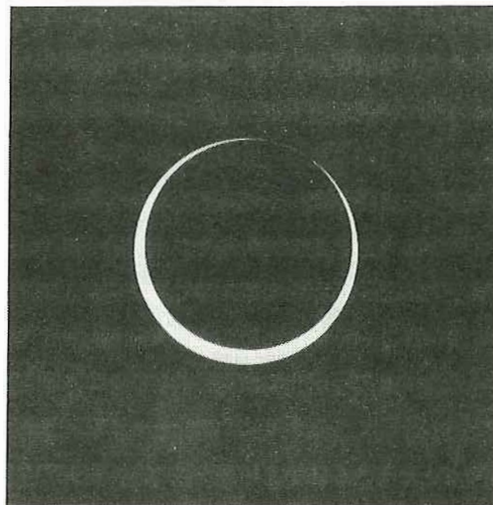
安だが、それはさておき、さっそく芝生に機材を並べてリハーサルをする。と、赤いシャツを着た初老のアメリカ人がやって来て、使っているフィルターや接触時刻について質問を始めた。一つ一つに答えた私にお礼を言って立ち去った彼は、しばらくすると新聞を片手に戻ってきた。そして私に新聞を読み聞かせてくれる。最後に「ほら、日食は明日なんだよ」と教えてくれるではないか。練習だと説明するとやっと納得し、お互いに大笑いしてしまった。午後からはアスカーリゴ夫妻のホテルを訪問。旧交を暖める。

夜はツアーで来られた山下先生のホテルに電話。飛行機が遅れたために十分な下見ができず、ホテルのベランダから観測されるとの事だった。その後、南北の方角を出すために芝生に行くと、昼とは別のアメリカ人から、「今夜はなせ月が見えないのだ」と質問されてしまった。

日食当日。文句のない快晴だ。今日は日本人だけでなく、各地からやってきたアメリカ人たちも機材を広げている。4歳の娘さんと二人連れでみえた高知の山口氏も合流。次第に薄暗く涼しくなる。すぐ後ろの木立に鳥の巣があり、親鳥が子供の所へ戻ってくる。昨日とはけた違いに鳴き声大きい。第2接触。見事なベイリービーズが見え、太陽はリングになった。芝生中に歓声上がる。しかしホテル脇の高速道路の交通量はいっこうに減らず、どこかで工事の音もする。世間は金環日食と関係なく動いていることも事実だ。皆既ではこうはいかないだろう。

およそ5分間のリング状態を終え、金環の左下が切れ始めた。第3接触のビーズは貧弱であった。いつもの事ながら、周囲が急速に明るくなり、いっぺんに緊張感がなくなる。今まであれほど注目を浴びていた欠けた太陽が、以前の4分の一ほどの注目しか集めなくなってしまう。哀れなものだ。連続食分撮影の合間に、アメリカの観測者の機材を見せてもらいにいったりする。望遠鏡やフィルターはいかにもアメリカの雰囲気だが、カメラは例外なく日本製だ。ほとんどの人が、11月の南米には出かけるそうだ。日本とはなんととっても近さが違う。

そうこうするうちに太陽は次第に太さを増していき、正午前には完全にもとに戻った。昨日、この時間には積雲がたくさん浮かんでいたが、今日は完ぺきな快晴で非常に暑い。おおまかに機材を片づけた後、昨日のうちに買って冷やしておいたシャンペンの栓を抜く。乾いた音で放物線を描いた栓をそのままに、全員で乾杯だ。冷たさが喉を通過すると、改めて日食の終わりを実感した。



第2接触のベイリービーズ